

私がデザインに興味を持ったのは、小学生の頃でした。家具製造販売をしていた父の仕事場で見、船の完成予想図——それがすごく魅力的だったのです。ただの絵ではなく、「空間をつくる絵」だった。その図面を模写しているうちに、「あ、自分にもできるかもしれない」と思ったのが最初の一步でした。

当時はまだ「デザイン」という言葉も一般的ではなく、「意匠」と呼ばれていました。工業高校卒業後、デザイン会社に就職し、そこでは素材を集めてサンプル帳を作ったり、照明や布地を選んだり、ひたすら実践を積み重ねました。当時は何のためにしているのか分からないような作業も多かったのですが、今思えば、それが自分の設計の基礎をつくってくれたのだと思います。

私が一番大事にしているのは、「トータルで考える」ということです。デザインは、椅子だけ、ロゴだけ、ではなく、空間全体が一つの“物語”として成り立っているかが重要です。若い頃、ホテルをまるごとデザインする機会を

いただいたとき、それを痛感しました。客室やロビーはもちろん、制服や調度品、照明に至るまで、全部つながっている。それをバラバラに扱っては、人に感動は伝わりません。

そしてもう一つは、「手間を惜しまないこと」。今の世の中、利便性や経済性ばかりが重視されていますが、本当に感動を生む空間というのは、細部にどれだけ想いや手間を込められるかで決まるのです。特注の照明をつくったり、素材を探して現場を歩いたり、そんな時間と労力の積み重ねが空間に“厚み”を生みます。だから私は、既製品で済ませるのではなく、できるだけ“その場所の空気”に合ったものを自分の目で選び、時間をかけて、丁寧に、真摯に作り上げていきます。

街ってね、生きてるんですよ。街を歩いていると、「あ、この配置いいな」とか「この木の使い方、面白いな」とか、自然と心が動く瞬間があるんです。たくさんの人が知恵や時間、エネルギーを注いで「手間暇かけて」つくられた

場所は、まるで“漫画の吹き出し”のように語りかけてくるんです。私はそのときの感覚をすごく大切にしていって、心の中で勝手に“ブルーカード”や“レッドカード”をつけているんです。「これ、いいね」「これはダメだな」って。

本当に良い街に行くと、人の表情が変わりますよね。自分が何者かを表現しようとしたり、知らない人と気軽に言葉を交わしたりします。自分の「役」や「特性」、あるいは「好み」を自然に表現したくなるような環境に身を置くと、感動が生まれます。そしてその感動が「常識」になって、「もう一度ここに来たい」「今度は自分たちでものをつくってみよう」という気持ちが芽生えるわけです。

つまり、街づくりとは「舞台をつくること」と同じです。芝居と同じように、街づくりにも脚本家がい、演出家がい、衣装担当、小道具、照明、音楽——。そして、そこに役者が立ち、観客がい、全体が一つの舞台として成立する。皆さんの仕事も、まさにその「舞台づくり」の一部なんです。例えば道を一本つくるにしても、「この道を

車で走りたいか」と思わせるような魅力があるかどうか。それが問われるわけです。

最高の舞台ができれば、人はその場で自分を見つめ、成長し、次の人生の目標を描き始めます。

どうすればそんな舞台ができるのか——それはまだ私にも分からない。でも、その「分からない」を求め続けることこそが、デザインの原点なのだと思います。

「デザイン」というものは、想いや思想を“かたち”に具体化することです。そして、その想いを未来に向け、デザインをどうつなげていくか——。

人は、自分の「好きな仕事」に就き、「好きな人」と生活を共にし、「好きな仲間」と過ごすこと。その三つが揃えば、それだけで人生は豊かになると思います。また、身近な人との日々の体験が、やがて自分の中の「アイデンティティ」となり、自分だけの“舞台づくり”の発想につながっていく。それが、私の考える「デザイン」なのです。

36ぶらす6 4号車マルチカー（写真：Studio NEXT 黛宏幸）／右下写真：36ぶらす6外観

特集 インフラとデザイン

MESSAGE

デザインという仕事を 選んで



水戸岡 鋭治
MITOOKA Eiji

プロフィール
デザイナー

1947年岡山県出身。1972年ドーンデザイン研究所を設立。建築・鉄道車両・グラフィック・プロダクトなどさまざまなジャンルのデザインを行う。なかでもJR九州の駅舎、車両のデザインは、鉄道ファンの枠を越え広く注目を集め、プルネル賞、毎日デザイン賞、菊池寛賞などを受賞。主なデザイン作品に、JR九州の新幹線、クルーズトレイン「ななつ星in九州」、「36ぶらす3」、特急「ふたつ星4047」、博多駅ビル「JR博多シティ」、大阪駅「大阪ステーションシティ」、東京「THE ROYAL EXPRESS」、東京都豊島区「IKEBUS」などがある。都電リニューアルプロジェクトが現在進行中。

撮影：白鳥真太郎

